

第六回

いわた俳句大会 入選作品集

主催 いわた俳句大会実行委員会



## 「あいさつ」

「第六回いわた俳句大会」に、ご応募下さり誠にありがとうございました。この時期、コロナ禍にて例年のように選者の先生をお招きして表彰式・俳句未来塾等の開催かなわず本当に残念でございました。又、ご応募された皆様にも申し訳なく存じております。

二〜三年前、念願かなって芭蕉の幻住庵を訪ねることができました。彼は、この琵琶湖を見下ろす場所で、人生を振り返り風雅を突き詰めていきました。一生ははかない、官位を上り詰め財を成したとて何になろうかと。

今、AIの時代となり人の仕事をロボットが代行します。では、人間にしかできないことは何か、季節の移ろいに感動し、人と人の交わりやその中の優しさに幸せを感じることはないでしょうか。

子ども達には、まず地域を愛し、お祭りを楽しんでほしいのです。そこで、人と人との交流を体験し、思いやりの心を育むことを願っています。一人だけの幸せはなく、回りの人々が幸せになれば自分も幸せであることに気づくでしょう。

人が人である証、雪月花を愛で慈しむ心を養う俳句作りは、この時代にこそ必要不可欠なことと考えます。

いわた俳句大会がそのお手伝いをさせていただければこれ以上の喜びはありません。

最後になりましたが、選者の先生方にはいつも勝手なお願いをお聞き入れ下さり本当にありがとうございます。改めて、御礼申し上げますと共に今後ともよろしくお願い申し上げます。

いわた俳句大会実行委員会 委員長 青島美子

## 大会選者



宇多喜代子 先生

山口県出身。現代俳句協会 特別顧問

二〇〇一年 第三十五回蛇笏賞、二〇〇二年 紫綬褒章、

二〇一九年 文化功労者

著書は、句集「象」、「記憶」、「森へ」など多数



高柳克弘 先生

静岡県出身。俳誌「鷹」編集長

二〇〇八年 第二十二回俳人協会評論新人賞、

二〇一〇年 第一回田中裕明賞

著書は、句集「未踏」、評論集「凜然たる青春」など多数

# いわた俳句大会

入選作品



# 一般の部

宇多 喜代子 選

## 特選 狛犬に石のやつれや銀杏散る

緒方恵美

(句評)

狛犬は長い歲月蹲ったまま「阿」「吽」の相で参拝の人々を見守っています。石を彫って作られた狛犬は、日光月光を浴び、風雨にさらされつづけているうちに、石に「やつれ」が見えてきた、そこに目をとめた句です。来る秋ごとに狛犬に散りかかる銀杏も、大きな古木だろうと思われます。「石のやつれ」という表現で狛犬として据えられた歲月を言い表した巧みな句です。中七の「や」からも狛犬への感慨が伝わります。

## 秀逸

探鳥のレンズの中に木の実降る 牧沢純江

(句評)

探鳥のためにカメラを構えたところ、まず鳥より先にあたりの紅葉がレンズに入ってきたのでしょう。この「木の実降る」は実際に木の実が降る様子というより、木の実をつける樹木の紅葉を見ているようです。

鬼踊まだ童顔の力こぶ 高林美子

(句評)

多くの青年たちの中の一人に焦点をあてた句です。しかもその一人の青年がまだ童顔であること、それでも相応な力こぶで祭に参加していること、これをよく見ている句で、臨場感が伝わってきます。

## 入選

棟上げの白木の匂ひ稲の秋 戸塚きき

小鳥来て今日の一日の始まりぬ 本多秀子

力石色無き風の中に在り 井上科子

稲刈つて空の遠のく棚田かな 寺田佳代子

母と子の長き影踏み秋惜しむ 鈴木順子

軸足の調子づきたる鬼踊 中川正男

終戦日父のしづかな箸づかひ 大村泰子

# 一般の部

高柳 克弘 選

## 特選 声変りの声ふりしぼる里祭

高島 昭子

(句評)

変声期の少年にスポットを当てたのが良かった。そのころの声は、響かせづらい。響かせづらいものを、無理してふりしぼっているというところに、少年の必死さが伝わってくる。彼は、けんめいに夜空に声を響かせている。「里祭」の伝統が、次の世代に着実に伝播していくことが予感される、めでたい句だ。

## 秀逸

ラジオより鯨の会話熱帯夜 鈴木みちる

(句評)

海洋生物を紹介する番組を聞いているのだろう。人間とは異なる世界で、異なることわりのもとに生きる彼らの「会話」は、神秘的で、ふっと現実を忘れさせてくれる。「熱帯夜」の息苦しさに、深海の冷気が入り込んでくるようだ。

シリウスや死を見届けし掌 一松祥子

(句評)

死者への思いをあらわにすることなく、「掌」という身体部位を出しただけで、読者に感じさせようとしている。死にゆく人の手を取ったのか。ほほを触ったのか。末期の場面を、さまざまに想像させる。夜空に輝くシリウスの輝きが、その死を荘厳する。

## 入選

アスファルト踏む白足袋や在祭 宮代麻子

若者の戻る寒村揚花火 桑原淑子

村祭父は女形の嵌り役 梶村初代

図書館の裏庭萩の風ばかり 高田茂子

宵宮の金魚すくひの袖袂 宮島敏明

開け放つ九月の扉人が好き 久田洋子

積もる葉へ紛れ入る音秋の蛇 一松正晴



# 中学生の部

宇多 喜代子 選

## 特選 高き声低き声越す鬼踊

水野結雅

(句評)

お祭りにはいろんな音が満ち満ちています。人の声、それも大きな声、どなるような声、車の走る音、物のぶつかる音などが、いつも以上に聞こえてきます。そんなもろもろの音や人声を「高き声」「低き声」という人の声に集約して簡潔な繰り返して表現したところに、多くの言葉以上の説得力があります。いかに鬼踊の人たちの声がおおきな波になって聞こえてきたかがわかります。祭ならではの「声」が伝わる句です。

## 秀逸

## 入選

お月様祖父と一緒にまたみたい

石田達平

曇り空間にのぞく白い光

宮本遼介

(句評)

かつておじいさんと一緒に月を見たことがあった、その時の安らぎの気分、月の美しさなどが忘れられないのです。なにかお話をしたのか、黙っていたのか、作者と祖父にのみ通じるいい時間。いい思い出です。

一粒のおもみ感じる露の雨

太田風俐

夕焼けに重なり光る一番星

三谷帆歩

積乱雲食べられそうで手を伸ばす

大杉友希実

来年はきつと花火を見に行ける

川中珠海

秋の蚊のとなり私とりんど飴

小泉怜菜

(句評)

むくむくした積乱雲は、柔らかくていかにも甘そうです。食べるとふわっとしていそうですね。そう思う人はたくさんいるでしょうが、「手を伸ばす」とまでいったところがこの句のいいところです。

啄木鳥がツンツンツンツンツン

山浦太暉

あじさいに一粒落ちる滴かな

早川さち

# 中学生の部

高柳 克弘 選

## 特選 海いけず草原の上はだしかな

鈴木愛来

(句評)

感染症の流行で、なかなか外に出かけられなかった今年を背景にした句と解してもよい。そうではなくて、ただ海へのあこがれを詠んだ句と取っても良い。いずれにせよ、「草原」がふつと海原に見えてくるような、不思議な錯覚を起こさせるところが魅力的だ。「いけず」と否定したことで、かえって「海」の存在感が高まる。否定形がよく効いている。

## 秀逸

### 秋蟬や父の世代の時刻表

水野結雅

(句評)

電車の時刻表でもバスの時刻表も、かつてはもっと本数が多かったのではないだろうか。つまり、この句が写しているのは、少子高齢化の進んでいく、今の日本の現実だ。「秋蟬」の音が、衰退していくこの国を嘆くかのように聞こえてくる。

### 気付いたら片手にスマホ受験生

加藤琴美

(句評)

スマホの向こうには、さまざまな誘惑の世界が広がっている。受験に集中しなければと思いつつも、ついSNSやゲームをしてしまう。受験生の正直な実態を、隠すことなく書いたのが良かった。

## 入選

りんご狩り妹のため奮闘す

兼子虎之介

庭先の木に這う百足蒼い空

田中駿輔

遠けれど心は近し天の川

浜田俐玖

あア声が祭りの声がないなんて

内山華純

サイダーの青白い泡ひかりけり

青木輝登

いなすまをふとんに隠れぼうぎよする

酒井美沙希

ポイ破れ優かに泳ぐ金魚かな

遠藤奏汰

# 小学生の部

宇多 喜代子 選

## 特選 夕方の田んぼの水がかがみのよう

渡辺萌衣

(句評)

田植え前の田や田植えがすんだばかりの田が「かがみ」のようにあたりの風景を映しているという句は、大人の句にもよくあるのですが、この句のいいところは「夕方の」です。一日の内の夕方というわずかな時間は、あたりの風景を微妙に変えます。そこに気づいたこと。これがよかったです。昼間の明るさの弱くなった「夕方」の田んぼは、夜になる前に最後の明るさで「かがみのよう」にあたりの景色を映し、照らしています。

## 秀逸

お祭りはみんな最後にはつぴぬぐ

石貝優稀奈

## 入選

どんぐりは毎日おなじ服をきる

佐久間麗妃

(句評)

この句を見たとき、そうだ、この句の通りだと思いました。「はつぴ」はお祭りの制服だということです。おじさんたちもお兄さんたちも、はつぴをぬいでまた普通の生活に戻るのです。そんな着眼点がよかったです。

ゆうやけを力いっばいかえす海

大橋麻衣

月曜日屋台の足あととどつてく

栗田結希愛

磐田が東京みたい星月夜

杉浦沙和

彼岸花さき始めるとよきによきと

栗原美月

あきがきたひーとかぜがふきはじめたよ

たけうちりくと

(句評)

作者には自分の住んでいる磐田の街が日本一きらびやかな大都市である東京のように感じられたのです。それが高層ビルやネオンサインではなく、「星月夜」の輝きであったというところが素晴らしい句です。

文化の日ひばの遺影笑ってる

榎本華

春の風花びらがちるランドセル

林果奈

# 小学生の部

高柳 克弘 選

特選 けしきゆれもち上げられてのるやたい 前島舞帆

(句評)

「けしきゆれ」というところに、やたいに乗せられるときの視界が、まことにいきいきと捉えられている。「やたい」を詠むときに、ただ見ているだけの句は多いが、自分が乗せられるという場面を切り取ったものは、めずらしい。ただ、わきで見ているというのではなく、自分もかかわっている場面を切り取ったからこそ、このようなみずみずしい句ができたのだ。

## 秀逸

つつじ咲く僕と君だけのあいことば

高橋結衣

(句評)

この「あいことば」が具体的に何かは、隠されている。「つつじ咲く」が合言葉というわけではない。ふたりのあいだに秘密の合言葉があるという、なにか胸が浮き立つような気分には、「つつじ」のくつきりとした赤や白が、妙に合うのだ。

ゆうやけを力いっばいかえす海

大橋麻衣

(句評)

夕焼けの色や強さを、こういう角度から表現できるのか、とおどろかされた一句。海を擬人化して「力いっばい」に「ゆうやけ」を照り返しているという表現が新鮮である。夕焼けだけではなく、その脇役として「海」を出したのが手柄だ。

## 入選

ねこ二匹昼ねした場所ひまわりだ

石原海斗

ころもがえ小さい服をよろこぶ母

宿澤詩織

天の川運転中で父見れず

竹花悠翔

ナストマトかぼちゃにきゅうりそぼのいえ

丸山二奈

ぞうりはき屋台の横をたったつと

村田拓音

あじさいは風がとおつてうれしそう

吉田瑠花

あきのよるポロツとぬけたこはるのは

松下小春





発行日 令和三年二月十九日（金）

編集・発行 いわた俳句大会実行委員会

問い合わせ先 いわた俳句大会実行委員会事務局

（磐田市教育委員会事務局教育部教育総務課）

静岡県磐田市国府台三十一

〒438-8650

TEL 〇五三八―三七―四八二一